

## 復刊の辭

飯田利行

戰災に遭つた焼け木杭、朽ち果てたものとばかり思ひあきらめてゐた其の焼木杭の根本から芽が萌え出でた。なにごとにあれ、すべて生れ出づるといふことは芽出度いことである。此度の『東洋學研究』の復刊はこの喜びにも譬えられよう。

想へば、私が同志と謀つて『東洋學研究』を創刊したのは昭和六年、會長笹川臨風博士の時のことであつた。當時、漢文系では、笹川博士のほか、小柳司氣太博士、諸橋轍次博士、安井小太郎先生、那智佐典先生等。國文系では、金澤庄三郎博士、福井久藏博士、豊田八十代先生、沼澤龍雄先生等が特異の風貌をもつて學生を指導してをられた。それから十年、十號まで刊行されたが、昭和十六年に大東亞戰爭突入とともに、第十號を最後として廢刊の憂き目をみるこゝとなつた。その後、今年に至るまでの十五年間は、まさに櫛風沐雨、狂瀾怒濤の春秋であつた。特に終戦後は滄桑の變も甚だしく、上下の風潮、擧げて歐米的となり、東洋文化淵叢の探究はおろか、その文化の根柢をも覆滅せられんとするに至つた。我が學園も同様、狂瀾を既倒にかへす術もなく、中國文學科廢止の聲さへ漲るほどとなつた。

駒澤大學の前身である「梅檀林」といふ大學林が開設されたのは、江戸の吉祥寺五世用山元照和尚（今より三八〇年前の天正年間）の時であるが、爾來、大學林の名聲は、官學昌平を摩し、特にその漢學の方面においても、駿河臺が駒込に一籌を輸するほどで、この傳統は連綿として江戸末期に至るまで續いてきた。昌平龔の秀才、原坦山が梅檀林の教授ならぬ一寮長に、漢學萬般にわたる商量において兜を脱がされ、つひに曹洞宗門に入り、やがて曹洞宗大學林の基礎を磐石たらしめた宗門の教學中興者となつた話題も、如何に大學林の漢學が素晴しかつたかを物語るものである。まさしく梅檀林の學門の背骨となりしものは漢學であつた。しかるに時代の風潮とはいへ、この漢學を宗門大學から抹殺せんとする風潮の漲つてゐたことは寒心にたへなかつた。

かゝる秋に際し、照顧脚下の聲が澎湃として起こり、由緒ある東洋學再興の聲とともに、今般さらに『東洋學研究』の復刊の實をあげることとなつた。新制大學發足から昨今までまさに危機であつた。戰前より東洋學科に御關係のあつた高村禪雄、大谷湖峯、竹田鐵仙、伊村正道、野村瑞峯教授去り、今や國文系においては、渡邊三男教授のみとなつた。幸ひ中國文學系においては、石島快隆教授、篠原壽雄講師の出身者にて、僅かに傳統を死守してゐる現狀である。何はともあれ、時代の風潮、學生の動向、當局の意向、汎ゆる危機を突破して漸く一縷の光明を望み得て、こゝに『東洋學研究』復刊號を世に問ふことの出來たことは、慶ばしき限りである。

昭和十五年十月三十日に、當時の會長福井久藏博士が、第十終刊號の終刊の辭を述べて卷を閉じてから滿十五年。はや歴代の會長ともに鬼簿に録せられ、迂生が此の杜絶えた光輝ある聯燈に點火せんとし

てゐるわけである。たゞその志のみ大なるも、その力の小なるを遺憾とする。幸ひに、同窓の諸賢、後につゞく學生諸君の御協力を俟つのみである。『東洋學研究』の復刊といふ微々たることが、本學の傳統の護持と發展に寄與し、さらには世界の文化に貢獻する一階梯とならば幸ひである。またさうあらんことを信じて復刊の辭とする次第である。

(昭和三十年八月三十日記)